

宮沢賢治・作 かしわばやしの夜 より抜粋

林のなかには浅黄いろで、肉桂のようなにおいがいっぱいでした。ところが入口から三本目の若い柏の木は、ちょうど片脚をあげておどりのまねをはじめるところでしたが二人の来たのを見てまるでびっくりして、それからひどくはずかしくて、あげた片脚の膝を、間がわるそうにべろべろ嘗めながら、横目でじっと二人の通りすぎるのを見ていました。殊に清作が通り過ぎるときは、ちよつとあざ笑いました。清作はどうも仕方ないというような気がしてだまって画かきについて行きました。

ところがどうも、どの木も画かきには機嫌のいい顔をしますが、清作にはいやな顔を見せるのでした。一本のごつごつした柏の木が、清作の通るとき、うすくらがりには、いきなり自分の脚をつき出して、つまずかせようとしてしまいましたが清作は、

「よつとしよ。」と云いながらそれをはね越えました。

画かきは、

「どうかしたかい。」と行ってちよつとふり向きましたが、またすぐ向うを向いてどンドンあるいて行きました。

ちようどそのとき風が来ましたので、林中の柏の木はいっしょに、

「せらせら清作、せらせらせらばあ。」とすす気味のわるい声を出して清作をおどそうとしました。

ところが清作は却ってじぶんで口をすてきに大きくして横の方へまげて

「へらへら清作、へらへらへら、ばばあ。」とどなりつけましたので、柏の木はみんな度ぎもをぬかれてしいんとなっていました。画かきはあっはは、あっははとびっこのような笑いかたをしました。

そして二人はずうつと木の間を通過して、柏の木大王のところに来ました。

大王は大小とりまげて十九本の手と、一本の太い脚とをもって居りました。まわりにはしっかりとけらしいの柏どもが、まじめにたくさんがんばっています。

画かきは絵の具ばこをカタンとおろしました。すると大王はまがった腰をのばして、低い声で画かきに云いました。

「もうお帰りかの。待ってましたじゃ。そちらは新らしい客人じゃな。が、その人はよしなされ。前科者じゃぞ。前科九十八犯じゃぞ。」

清作が怒ってどなりました。

「うそをつけ、前科者だと。おら正直だぞ。」

大王もごつごつの胸を張って怒りました。

「なにを。証拠はちゃんとあるじゃ。また帳面にも載つとるじゃ。貴さまの悪い斧のあとのついた九十八の足さきがいまでもこの林の中にちゃんと残っているじゃ。」

「あっはっは。おかしなはなしだ。九十八の足さきというのは、九十八の切株だろう。それがどうしたというんだ。おれはちゃんと、山主の藤助に酒を二升買ってあるんだ。」

「そんならおれにはなぜ酒を買わんか。」

「買ういわれがない」

「いや、ある、沢山ある。買え」

「買ういわれがない」

画かきは顔をしかめて、しょんぼり立ってこの喧嘩をきいていましたがこのとき、俄かに林の木の間から、東の方を指さして叫びました。

「おいおい、喧嘩はよせ。まん円い大将に笑われるぞ。」

見ると東のとつぷりとした青い山脈の上に、大きなやさしい桃いろの月がのぼったのでした。

入力：土屋隆 校正：noriko saito

2005年2月21日作成

第 18 回 青空文庫朗読コンテスト 課題
宮沢賢治・作「かしわばやしの夜」より抜粋

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。